

『一人の笑顔のために』

人権学習 教科書無償の闘いから学ぶ ～紫雲丸事件～

11月27日の学級懇談会の日、学校では「人権学習」に取り組みました。2年生では、「教科書無償の闘い」について学びました。

「人の値打ち」などの詩で有名な人権詩人の江口いとさんという方がいらっしゃいました。もう十数年以上も前になりますが、江口いとさんと直接お会いし、「教科書無償の闘い」につながる「紫雲丸事件」についてお話を伺ったことがあります。その時の話を紹介します。

四国と本州は、今は橋で結ばれていますが、以前は国鉄の宇高連絡船が交通の大動脈でした。

1955（昭和30年）5月11日、高松を出港した紫雲丸が、濃霧のため第3宇高丸と衝突しました。わずか4分という瞬時に沈没し、168人の乗客が亡くなるという大きな惨事になりました。

沈没した紫雲丸には、京都や奈良方面へ向かう高知県の中学生117人が修学旅行で乗船していました。そのうち28人の生徒が犠牲になりました。この痛ましい事件は、手をあげ必死に救いを求める多くの子どもたちの生々しい写真とともに、人々に大きな衝撃を与えました。

なぜ子どもたちに多くの犠牲者が生じたのでしょうか。この背景には現在では想像もつかないほど貧しかった時代の状況が秘められていたと、今でも関係者の中で語り継がれています。

保護者はわが子のために、借金しての修学旅行参加であったともいわれ、またカバンなども、親戚や知人からの借り物も多かったとのこと、「絶対なくしたらいかんぜよ」と言われての旅でした。このような状況での衝突事故の中、「甲板から船室へカバンなどを取りに戻ったため犠牲が多かったのではないかと助かった人は語っておられます。

この事件について、江口いとさんは次のように話されました。

運良く助け出された子どもたちは、海岸沿いの旅館等に運ばれました。人数も多く何軒かの旅館に分かれて子どもたちは寝かされていました。そこに、知らせを受けた母親たちが駆けつけ、自分の子どもの名前を叫びながら子どもを探し、いないと分かると次の旅館に走るといった状況でした。そのような状況を見て、先生たちはその旅館に寝かされている子どもたちの名前を紙に書き、それぞれの旅館の玄関に貼りました。しかし、それでも母親たちは自分の子どもの名前を呼びながら子どもを探し、いないと次の旅館に移動するという状況でした。先生たちは、『玄関に名前を貼りだしてありますので、その名前を見てください。』と何度も母親たちに説明しますが、母親たちは玄関で名前を確認しようとはしませんでした。

「なぜだろう？」と思いながらも、先生たちは何度も「玄関の名前を見てください！」と母親たちに説明をされます。それでも母親たちは先生たちの言葉に耳を貸そうとはしなかったのです。

そして先生たちは気づきます。母親たちが文字を読めないことに・・・。

この事件をきっかけに、差別と貧困からの解放を願い、子どもたちに満足な教育を受けさせてやりたいという保護者の気持ちがいよいよ高まっていきました。

こうした地元の状況の高まりの中から、1961（昭和36）年、高知県から教科書無償化の運動が起こりました。運動の輪は全国へ広がり、1964（昭和39）年から段階的に教科書の無償化が実現したのです。

自分の子どもたちには、自分と同じ苦勞をさせたくないという親の願いや、全ての子どもたちに平等に教育を受けさせてやりたいという先人の思いを、私たちはしっかり受け止める必要があると感じています。

そのようなたくさんの思いが詰まった「教科書」で、しっかり勉強しましょう！

